

生涯にわたる学びとの出会いと 学びの継続、つながりの支援について ～生涯学習の新たな出会いのつなぎ直し～

報告書の本編は
こちらから

小田原市社会教育委員会議では、令和4年度から2年間、コロナ禍を経た新しい生活様式を前提としながら、より良い学びの実践につながるよう協議し、教育振興計画の関係所管へ施策等への反映を働きかけました。

この議論を踏まえ、デジタル技術を活用した新たな学びの機会が増える一方、人と人とのつながり希薄になる中で、全ての人に生涯にわたる学びとの出会いをどう提供し、その学びを継続し、学びを通じて出会った仲間とのつながりを支援するかなど、令和6年度から2年間は、生涯学習活動の支援について協議してきました。この結果、現在の生涯学習センター事業について、事業別に4つの視点と7つのアイデアを整理しました。

学びとの「出会い」の創出

最初に学びに出会うとき、**興味や関心を高めてもらう**ための支援とは。

年齢や障がいに関わらず、**すべての人に学びとの出会いを創出**するには。

働く世代、子育て世代への学びの機会を作るには、どんな支援が必要か。

学びの「継続」の支援

出会えた**学びの継続をどう支援**するか。

学びの**成果を評価して、継続を促していくような仕組み**をどのように作るか。



学びを通しての「つながり」の支援

学びを通じて知り合った**仲間との「つながり」をどう支援**するか。

学びを深めるための**大学など他機関との連携**をどのように考えるか。

サークルやグループの形成を促進するための支援とは。

学んだ成果を「活かす」支援

学んだことを個人の自己実現で終わらせずに、**まちづくりに活かす**には何が必要か。

一人ひとりが持っている**学びの楽しさを広く伝える方法**について



生涯学習センター事業と4つの視点ごとの主な意見・アイデア

1 キャンパスおだわら（学習講座・学習情報・学習相談・人材バンク事業）

生涯学習センターにおいて、行政主催の講座の実施、生涯学習情報誌（自分時間手帖）の発行、学習相談やボランティア講師の人材バンクを運営している。

<主な課題>

- ・民間と比較して、行政が行うべき生涯学習講座とはどのようなものであるべきか。
- ・人材バンクのキャンパス講師主催の講座がより充実するには、どんな支援が必要か。



人材バンク「キャンパス講師」の活躍の場として市が開催する夏休みおもしろ学校

学びとの「出会い」の創出

- 親も面白そうだと思うような動機付け。特に**若年層や中高年層を対象にした事業展開**に注力してはどうか
- 自分時間手帖だけではイメージがしにくい。どんな人たちが学んでいるか、**顔の見える発信**で変わるのでは。
- 若い人は、持続性というより単発が好き。人材バンクも時には**一日体験など開かれたサークル**があると良い。

学びの「継続」の支援

- 子ども向けイベントは、けやきのイベントとして単発ではなく**ある程度期間を長く設定して開催**すると良い。
- 1日体験講座から次の参加につなぐため、**講師に宣伝方法を伝えたり、参加者にアクセス方法を投げかける**。
- 人材バンク事業における、講師と参加者のミスマッチを防ぐため、**講座の紹介動画**をつくってはどうか。

学びを通しての「つながり」の支援

- 体験学習が「1日体験」で終わらないよう、**同じ講師の講座紹介や関連講座**など、次につながる情報発信を。
- 杉並区の「すぎなみ大人塾」の例。参加団体が一堂に会してイベント化し、**団体同士の情報共有の場づくり**。

学んだ成果を「活かす」の支援

- 講座の企画を**団体主導で、企画をプレゼンしてもらう**自治体もある。市で「郷土」など条件付けをしては。
- コミュニティスクールでは、**グラウンドや教室や教室を地域に開放する**といった「土曜日学校」がある。

2 サークル・団体の支援、地区公民館支援

生涯学習センターにおいてサークルや生涯学習団体の活動の場をつくとともに、各自治会等が管理する地区公民館における活発な生涯学習活動を促進している。

<主な課題>

- ・団体活動を支援するため、認定団体制度における優遇措置のほかに有効な方法は。
- ・市公民館連盟加盟館長の高齢化が進む中で、市公連で行う活動のマンパワー不足。



谷津公民館で健康体操を行う様子

学びとの「出会い」の創出

- **フェスティバルのブースを学校の生徒たち**にお店を持たせ、子どもや若者の参画という視点でやってみる。
- マネタリーの導入でインセンティブが高まる。**フリーマーケットや手作り市などを試験的に導入**しては。
- **地区公民館にキャンパス講師を呼ぶ**など、**地域と講師のマッチング**してもらえると、活動の幅が広がる。

学びの「継続」の支援

- 生涯学習フェスティバルは、舞台発表が多い印象。親子連れで来た場合に、太鼓を実際に叩いてみるなどの**体験型を増やせば**次につながるのではないかな。



学びを通しての「つながり」の支援

- 地区公民館は**縁側のような場所**であってほしい。飲食しながら防災の話をするなど、食べ物も大切なツール。
- 年代も異なる既存団体に入るのは難しい部分も。**ミドル世代が新規で仲間も作れるプチ講座**があると良い。
- **子どもと大人の仲介役として「大学生」**がいることで、子どもが生き活きと活動したことがある。
- 学校を利用する**吹奏楽団があるが、学生の吹奏楽部とつながれば**新たな学校としての関わりも生まれてくる。

学んだ成果を「活かす」の支援

- 実行委員会のように**子どもたちが主体者として行事を企画**することで、他の交流や参加に積極的になった。
- イベントに訪れた親子にお手伝い券を渡し、チラシ配りなど**小さなボランティア体験を準備する**ことも有効。

3 家庭教育学級・PTA研修

家庭教育を充実させるための家庭教育講演会や、各学校や保育園が実施する家庭教育学級を行うほか、PTA研究集会やPTA広報者研修会などの研修を実施している。

<主な課題>

- ・コロナ禍を経て、家庭教育学級を開催しない団体が増えた。開催を促す手立ては。
- ・PTA活動は活性化が難しく、負担を減らし事業のスリム化を図っていく必要がある。



令和6年度の家庭教育講演会

学びとの「出会い」の創出

- 家庭教育講演会や家庭教育学級については、**子どもも一緒に参加できるように**すると間口が広がるのでは。
- **PTA関係の研修内容をアーカイブ化**して学校ごとに配付し、各学校で役員等が活用できるようにすると良い。

学びの「継続」の支援

- 各学校の家庭教育学級などの**講師料軽減策としての「きらめき出前講座」の活用**や地域の講師情報の共有化。
- 保護者が学校に来る行事に合わせて、短時間で保護者同士が家庭教育の在り方について話し合う場をつくる。

学びを通しての「つながり」の支援

- **防災訓練を小中学校の防災教育等とコラボ**してやれば、対象者の間口も広がり、市民の関心が高まるのでは。
- **学校をフィールドとして行われる講演会等**を活用し、保護者に参加を呼びかけ、成人教育をカバーしていく。

学んだ成果を「活かす」の支援

- **中学生が地域の健民祭や敬老会に参加**することも。チャンネルがあれば、中学生が地域の活動を支えられる。
- 家庭教育学級では**移動型プラネタリウムが体験型で有意義**。「楽しかった」記憶が次世代の教育につながる。

協議を受けての事業展開について

生涯学習の現場では、コロナ禍を経て、教育機会や学習意欲の低下などさまざまな影響が残っています。こうした課題を踏まえ協議を重ねた結果、協議テーマである「生涯学習の新たな出会いのつなぎ直し」を実現するための今後の事業展開について、4つの視点でのアイデアをもとに事業案を提案しました。

(1) 市民ニーズの把握

“視点Point”

出会い

趣味や教養だけでなく、ボランティアや地域貢献につながる「学び」への転換を促すニーズ把握が生涯学習にとっては重要となる。

現在も一定の情報収集は行われているが、今後も、様々な手法を組み合わせることで、多様な学習ニーズを多角的に捉えていくことで、効果的な生涯学習事業の提供につなげていく。

具体的なアイデア

- アンケート調査、ワークショップ、相談窓口、その他各種の情報収集により、利用者の詳細、市民ニーズの把握を推進する。



(2) 若年層を意識した企画の検討

“視点Point”

出会い

継続

人口減少と高齢化が進む時代、生涯学習施策においても、子ども、若者、また働く世代も含めた若年層を意識することが事業の持続可能性、地域の人材育成に向けて重要である。

具体的なアイデア

- 中学生・高校生・大学生が楽しみながら企画や事業に参加できる場を提供する。
(例：「夏休み子どもおもしろ学校」の**一部を学生が主導する企画枠として**展開する)
- ICTとデジタル技術を活用**し、学習効率を向上させる。
(例：オンライン講座やパブリックビューイングを活用した講座、電子申請での講座申込)



(3) 子ども向けイベントの拡張と親も楽しめる仕掛けづくり

“視点Point”

出会い

継続

主に小学生を対象とした「夏休み子どもおもしろ学校」や、子ども限定ではないが「キャンパス講師による1日体験講座」は参加希望者が多く、人気の講座は抽選になっている。
子ども向けイベントに対するニーズは大きい。長いスパンで実施し、継続的に開催してはどうか。

具体的なアイデア

- 子どもと親が共に参加できる体験型イベント**の仕掛けを拡充する。
(例：親子で楽しむクッキングや職業体験、宝探しやビンゴなどのゲーム型イベントなど)



夏休みおもしろ学校でのボードゲーム教室

(4) 「愛着」の醸成、「郷土教育」の充実

“視点Point”

継続

活かす

生涯学習において「愛着」を持つことは「学びの継続」や充実感につながる。知ること、交流することにより得られる気づきが、好きなことを長く続けていく原動力となり、地域づくり人材の育成にもつながる可能性がある。小田原の歴史、自然、食べ物など、**多くの地域資産をを守り継いできた企業・団体などとも協力しながら**市民全体で長期間かけて共有していけるポテンシャルがある。

具体的なアイデア

- 郷土の自然や文化、なりわいを教材**とした郷土教育の充実
【郷土教育としての具体的題材】
食べ物（特産物・パン屋など）、小田原城を含めた歴史的建造物など



郷土の歴史を学ぶキャンパスおだわら行政講座

（５）多様性を尊重した交流型・体験型の学びの実現

“視点Point”

出会い

つながり

年齢、性別、国籍、障がいの有無、文化的背景等に関わらず、全ての人に生涯にわたる学びとの出会いの機会を提供するには、さまざまな世代のほか、ハンディキャップのある方など、これまでアプローチが不足していた人との共生が課題となるため、すでに関係を築いている国際交流関連・社会福祉関連機関・団体などと共に企画・運営することも必要と考える。

具体的なアイデア



- 障がいのある方と健常者が交流できる場を設置する。
- 手足が不自由な状態を実体験できるワークショップの開催など、体験型学びを通じた新たな価値の共有を図る。



車いす体験をするボランティア体験の講座

（６）「地区公民館」を利用した地域教育の可能性

“視点Point”

出会い

つながり

本市の地区公民館は、地域づくりや住民活動の促進のために、自治会等の住民が管理・運営する地域に根ざした施設であり、自由度が高く柔軟な運営ができるという特性を併せ持っている。

そこで、**緩やかで気軽なフリースペース**として、「縁側」のような人々の集いの場としての役割の可能性が有る。このような場を地域の人々が集い「つながる」場として、さらなる活用を図る。

具体的なアイデア



- ・市全域で展開する「キャンパスおだわら」のキャンパス講師による講座や「きらめき出前講座」を地区公民館で実施する。
- ・地区公民館において、地域に根ざした郷土芸能の伝承活動をしたり、防災・危機管理についての学びの場を提供する。



桜井稲作組合の指導のもと、伝統の栢山田植え歌を聞きながら田植え体験をする報徳小の子どもたち

(7) 「学校」をフィールドとした地域教育・家庭教育支援など

“視点Point”

つながり

活かす

人間関係の希薄化が指摘されている中でも、昔ながらの一定のコミュニティが残されている場として「学校」が挙げられる。**学校をフィールドとした地域教育**は、単に知識を得る場としてだけでなく、地域社会の再構築や生涯学習社会の実現に向けた「**開かれた学校づくり**」の手法として注目されている。一方で、近年、働く親たちにとって家庭教育にまつわる**孤独感や悩みに寄り添うような地域教育・家庭教育支援**について、**学校を舞台として展開**していく可能性を考えていく。

具体的なアイデア



- ・ **地域全体で家庭教育をサポートする仕組み**を築き、地域交流を促進する。子どもたちが大人になった後、地域貢献をする視点を育てるような施策を展開する。
- ・ P T A 研修は、**同じ講師の関連講座や過去講座を一覧化**、または動画化して共有し、次世代へつなげる学びの場を提供する。



多古公民館の文化祭での白山中学の吹奏楽部の演奏

- 各事業について次のアイデアが該当します。

○キャンパスおだわら⇒(1)～(4) ○サークル団体の支援、地区公民館支援⇒(5) (6)
○家庭教育学級・PTA研修⇒(7)

【今後の展開について】

これまでの協議内容を事業展開に反映させていくことを通じて、子どもから若者、シニアまで、様々な世代の人たちが主体的に学び、社会に関わる機会が生み出され、本市のまちづくりの目標のひとつである「未来を拓く人が育ち、地域の絆が結ばれる小田原」の創出にも貢献していきます。